

結束型集団における潜在的機能の生起メカニズム解明

—大学クラブ・サークルを事例とした社会関係資本に関する計量的研究—

鈴木 伸生

本稿の目的は、集団における社会関係資本の潜在的な正機能・逆機能を同一集団から体系的に解明することである。そのために、本稿の研究対象集団を結束型集団（大学クラブ・サークル）に限定したうえで、その社会関係資本（個人レベル／集団レベルの構造的・認知的社会関係資本）の正機能・逆機能についてメカニズムを定式化し、統一的に実証することを試みた。具体的な実証的課題として、正機能の検討課題では、内部成員に対する表出的機能と外部の結束型集団成員との社会関係資本の形成促進を選定し、逆機能の検討課題では、外部の橋渡し型集団成員との社会関係資本の形成阻害を選定した。この「結束型集団における社会関係資本の潜在的な正機能・逆機能解明」という検討課題に対する解答を、3つの下位課題（(1) 結束型集団の社会関係資本が、メンバーの主観的健康に作用するメカニズム、(2) 結束型集団の社会関係資本が、メンバーの外集団（同類／異類）ネットワーク形成に作用するメカニズム、(3) 結束型集団の社会関係資本が、メンバーの一般的信頼（橋渡し型の信頼）形成に作用するメカニズム）を検討することを通じて、提示することに定めた。これらの下位課題を検討するために、分析には、2012年2月～3月にかけて総合大学1校の学生を対象に実施した、「大学生のサークル・クラブ活動に関する調査」データを用いた。

分析の結果は、以下の通りである。下位課題(1)では、第1に、個人レベルの構造的な社会関係資本と集団レベルの構造的な社会関係資本がメンバーの主観的健康に正作用していた。第2に、健康に対する認知的な社会関係資本の効果は疑似相関であり、構造的な社会関係資本の効果に起因していた。下位課題(2)では、第1に、集団レベルの認知的な社会関係資本が外部集団成員との同類ネットワーク（外部集団の大学生成員）形成を促進していた。第2に、個人レベルの認知的な社会関係資本と集団レベルの構造的な社会関係資本が外部集団成員との異類ネットワーク（外部集団の社会人成員）形成を阻害していた。下位課題(3)では、第1に、個人レベルの認知的な社会関係資本と集団レベルの認知的な社会関係資本が一般的信頼（橋渡し型の認知的な社会関係資本）の形成に正作用していた。第2に、一般的信頼に対する結束型集団の認知的な社会関係資本の効果は、個人レベルの構造的な社会関係資本の効果

を媒介していた。このように、理論的には結束型集団の逆機能の1つとして想定された一般的信頼への影響は、正機能をもたらすことが明らかになった。以上の結果より、結束型集団の社会関係資本は、その多寡によって、正機能と同時に逆機能も生じることが、同一集団の分析から明らかになった。

社会関係資本研究に対する本稿の貢献は、3点ある。第1の貢献は、結束型社会関係資本のトレードオフ機能に関するものである。本稿の知見から、集団間で社会関係資本の相対的な多寡が異なることで、ある従属変数では潜在的な正機能が生じると同時に、別の従属変数では潜在的な逆機能が生じるというトレードオフ関係の存在が確認された。この知見は、個人の効用関数が時間的に変化しないような同時点の場合でも、結束型集団における社会関係資本の潜在的な正機能・逆機能が共起しうることを示した点で、社会関係資本論に寄与するものである。第2の貢献は、Putnam（2000）の理論的な言明に対するものである。本稿では、「結束型社会関係資本から橋渡し型社会関係資本を形成できない」というPutnam（2000）の言明に関する成否も検証した。その結果、結束型社会関係資本からは、橋渡し型・構造的な社会関係資本は形成できないけれども、橋渡し型・認知的な社会関係資本は形成可能であることが明らかになった。第3の貢献は、集団における社会関係資本の機能を検討する上で方法論に関するものである。本稿の知見は、集団における社会関係資本の機能を検討するためには、結束型集団と橋渡し型集団の分類はもとより、諸要素（個人レベル／集団レベル、構造的・認知的側面）を明確に区別・測定したうえで、各機能を比較検討する必要があることを示している。

さらに、集団参加研究に対する本稿の貢献についても、1点、指摘しておきたい。それは、集団参加の平均値をコミュニティレベルの社会関係資本と捉えることに対する方法論的問題点である。本稿の分析結果から、機能を発現する側面（構造的・認知的側面）は異なるものの、結束型集団における集団レベルの社会関係資本の機能が、一貫して確認された。もし、その他の結束型集団においても、集団レベルの社会関係資本の機能が一定で存在しうるならば、個人レベルの集団参加の平均値をコミュニティレベルの集団参加の指標として用いた研究では、集団参加の機能を十分に捉えきれていない可能性がある。さらに、コミュニティレベルの社会関係資本の機能だと思われてきたものは、実は先行研究で捉え損ねてきた集団レベルの社会関係資本の機能が反映されたものに過ぎないかもしれない。このように、コミュニティレベルの社会関係資本の機能については、集団内部の集団レベルの社会関係資本の機能も考慮して、再評価する必要があるだろう。

論文審査結果の要旨および担当者

提出者	鈴木伸生
論文審査担当者	(主査) 教授 佐藤嘉倫 教授 木村邦博 教授 阿部恒之 教授 浜田宏 准教授 永吉希久子
論文名	結束型集団における潜在的機能の生起メカニズム解明—大学クラブ・サークルを事例とした社会関係資本に関する計量的研究—
<p>本論文の目的は、集団における社会関係資本の潜在的正機能・逆機能を同一集団から体系的に解明することである。この目的のために、研究対象集団を結束型集団（大学クラブ・サークル）に限定した上で、その社会関係資本の正機能・逆機能についてメカニズムを定式化し、統一的に実証することを試みた。</p> <p>第1章と第2章では、先行研究を踏まえながら、「機能」や「社会関係資本」の概念的整理を行った。機能概念については、潜在的な正機能、潜在的な逆機能、顕在的な正機能、顕在的な逆機能の4類型を明確に定義し、社会関係資本概念については、構造的な社会関係資本、認知的な社会関係資本、結束型社会関係資本、橋渡し型社会関係資本等の概念整理を個人レベルと集団レベルで行った。このような概念整理を行った上で、本論文において解明すべき問題を明確にした。</p> <p>第3章では、結束型集団の社会関係資本の正機能のメカニズムを調べるために、自ら収集した調査データを用いて、社会関係資本の主観的健康に対する影響を検討した。その結果、結束型集団の構造的な社会関係資本が主観的健康に正作用するメカニズムには、直接的な作用と間接的な作用の両方があることが分かった。</p> <p>第4章では、結束型集団の社会関係資本における正機能・逆機能のメカニズムを調べるために、社会関係資本の外集団ネットワークの形成に対する影響を検討した。その結果、集団レベルの認知的な社会関係資本が外部集団成員との同類ネットワーク形成を促進していたこと、また個人レベルの認知的な社会関係資本と集団レベルの構造的な社会関係資本が外部集団成員との異類ネットワーク形成を阻害していたことが明らかになった。</p> <p>第5章では、結束型集団の社会関係資本における逆機能のメカニズムを調べるために、一般的信頼に対する影響を検討した。その結果、個人レベルと集団レベルの内集団信頼が一般的信頼に作用するメカニズムには直接経験一般化と間接経験一般化の両方があることが示唆された。</p> <p>第6章では、前章までで得られた知見を整理した上で、本論文の学術的貢献を示した。</p> <p>本論文は先行研究の問題点を的確に指摘し、それを解決するために機能概念と社会関係資本概念を詳細に検討し、それに基づいてオリジナルな仮説を提示し、自ら収集したデータを分析することで、その仮説の経験的妥当性を検証し、それに基づいて社会関係資本研究と集団参加研究の進展に貢献している。</p> <p>よって、本論文の提出者は、博士（文学）の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。</p>	